岐路と選択

第1幕・入り口



01 / 15・記憶

大きな影響を受けた時期

思春期に味わったある体験が、ひときわ大きな意味をもつものとして記憶されている。



02 / 15・記憶

画面から聞こえる声

その記憶は、あるテレビ放送と結びついている。公開版では番組の司会者の名前を明かしていない。



03 / 15・芸術的再構成

部屋に差す青い光

光る画面は絵による解釈であり、当時の映像を正確に再現したものではない。



04 / 15・考察

いつもと違う感覚

内面の感じ方が変わったことを、本人の体験として語っている。



05 / 15・編集上の注記

仕組みを断定しない

「第三の目」という言葉は、本人が感じ取った意味を記したものです。身体に実証済みの変化が起きたことを示すものではありません。

岐路と選択

第2幕・つながり



06 / 15・考察

二つの鏡像

後の語りでは、この時期が、自分の中の女性としてのあり方に気づく過程と結びつけられる。



07 / 15・芸術的再構成

結論を下さない鏡

一つの鏡に二つの像が映る。そこには、自分を見つめることと二面性が表されている。



08 / 15・考察

意味が育つ

後になって生まれた解釈と、その当時に知りえたこととは区別する必要がある。



09 / 15・記憶

人には見えない内面

自分をどう捉え、どう表現するかは、長い年月をかけて少しずつ育つことがある。



10 / 15・編集上の注記

公開版の語り手

公開用に再構成されたこの物語では、Mea Zen が女性の語り手として登場します。

岐路と選択

第3幕・意味



11 / 15・芸術的再構成

岐路に立って

岐路は選択を描いたものだ。どこかの道で実際に転機を迎えた、という意味ではない。



12 / 15・考察

自分を語る言葉を見つける

最初に感じた思いを言い表す言葉が見つかるのは、ずっと後になることもある。



13 / 15・編集上の注記

説明は一つに限らない

物語は、心理、文化、個人の経験というさまざまな角度から解釈できる余地を残している。



14 / 15・次への橋渡し

外の世界に誘われて

内なる発見の後に、新しい場所や考え方に出会う旅が待っている。



15 / 15・未完

一瞬では終わらない過程

自分について知ることは、一晩で終わるものではない。物語は先へと進む。